

転換期日本の〈美術/教育〉：

「アートする力」とは何か ― その未来への可能性を探して

開催日 2016年**5月21日**（土）13:00～17:00

場 所 東京工業大学 キャンパス・イノベーションセンター 4階ラウンジ
〒108-0023 東京都港区芝浦3-3-6

企画趣旨

文化、教育、産業、さまざまな局面において転換期にある日本。その中で、アートがなしうる力とは何でしょうか。美術館の内外、学校の内外、日本の内外で行なわれているアートの諸実践は、すでに「作家／観客」、「作る／見る」、「現実／サブカル」という二項対立を超えて広がっています。この新しい「アートする力」とは何でしょうか。それは残念ながらまだ十分に言葉化されておられません。本リサーチフォーラムでは、世界各地のクリエイティブシーンに注目し、『キッズサバイバル』『アートという戦場』などの本を編集され、近年、表現教育プロジェクトを推進されている津田広志氏をお招きします。氏の基調報告のあと、「アートする力」をめぐるシンポジウムを開催いたします。多くの現場をつなげ、転換期の日本の〈美術/教育〉の未来を議論するきっかけの場をつくりたいと願っております。

基調報告

3つの「アートする力」
—— 無限へ、無意識に、越境的に。

津田広志（フィルムアート社）

シンポジウム 津田広志（フィルムアート社）
長田謙一（名古屋芸術大学）
神野真吾（千葉大学）
谷口幹也（九州女子大学）

参加費 **無料** *どなたでも参加できます。

参加申込 メールにてお申し込みください。申し込みアドレス mgavro540@icloud.com
件名に「5/21 シンポ」、本文に「お名前、人数」を明記しメールください。当日参加も大歓迎です。

主 催 美術科教育学会 企画運営 美術科教育学会・現代〈A/E〉部会



【プロフィール】

津田 広志

メディア・ディレクター。株式会社フィルムアート社取締役。青山学院大学 社会情報学研究科客員教授。東京工業大学 CreativeFlow Lab コンテンツディレクター。企画編集書に、川俣正『アートレス』、『アートリテラシー入門』、『アート×セラピー潮流』など多数。著書に、映像論「物語の方へ」（ダゲレオ評論賞優秀賞）、『リ・クリエイティブ表現術』（新水社）など。大学と社会をつなぐ産学連携や「編集デザイン」を方法とした社会人の表現教育プロジェクトの推進を行なっている。

長田 謙一

名古屋芸術大学教授。現代〈A/E〉部会代表。美学上での価値観と実践的な活動に伴う現実的な状況をたえず見比べ新しい体系を模索している。多数のアートプロジェクトに参画し、美術における〈近代〉の問題を多面的に研究する。1998年「ジョセッペ・テラーニ ファシズムを超えた建築」展（水戸芸術館）での記念シンポジウム「建築と政治」などに参加し、主な編著として、『日本近代デザイン史』（共編著）、『戦争と美術・表象 20世紀以後』（編著）、『テートの美術館鑑賞術』（共監訳）などがある。

神野 真吾

千葉大学准教授。WiCAN実行委員長。現代〈A/E〉部会メンバー。アートを核とした多様な活動を企画し、現代社会の今日的課題に対する実践的ソリューションを提案実践する。著作に「危機の時代とアート」（『講座哲学第7巻 芸術/創造性の哲学』岩波書店）、「実際的な教科へ ～個性・創造性の捉え直し～」（『教育研究』no. 1328, 初等教育研究会）、「美術という「文化」を考える」（『美術教育の題材開発』武蔵野美術大学出版局）などがある。

谷口 幹也

九州女子大学教授。現代〈A/E〉部会メンバー。人間という存在の不思議さに向き合い、芸術の社会における役割、表現行為の教育的意味とその可能性を研究している。そして現在、戦後美術教育の歴史的検証を行う。著作に「危機に立ち向かう意志と身体—創美の今日的意味と可能性—」（『美育文化』2014年1月号）、「精神を見る：苦悩に触れる」（『現代 アートの本当の見方』フィルムアート社）などがある。

【アクセスマップ】

会場 東京工業大学キャンパス・イノベーションセンター 4階ラウンジ

所在地：〒108-0023 東京都港区芝浦3-3-6

